

## 『研究通信』一号発刊のころ

塚 本 哲 人

『研究通信』一号は、一九五三年三月に発行された。その一号をいま手にして、当時のことを想い出している。手元には、山形大学人文学部日本経済史研究室を事務局として発刊された最新の『研究通信』九九号もある。両者をくらべると、私たち素人の謄写印刷でつくった一号の体裁の拙さが、何としてもきわだっている。それだけ感慨ひとしおいふべきか。

「村落社会研究会の発足にあたり」と題する有賀喜左衛門先生の一文が、その一号の冒頭を飾っている。「決して本会を代表したのではありませんが、研究会の成長を心から祈りつゝ、会員の皆様に御挨拶申し上げます」と結ばれているこの文章には、先生のお人柄がにじみでている。美辞麗句を連ねることなく、ただ切々と「この会の目的を達成する道」として、「同志の結合を強めるための基本的な考え方と方法を持つこと」と、「我々の研究成果を現状の危機において日本人の生き方の上に大きく生かしたいという熱望」にあることという二つを説いておられる。村落発足の初心を、ここにみる想いである。

村落研究者の組織をつくってはどうかという話が出てきたのは、一九五二年の夏ごろではなかったかと思う。五〇年代に入っていよいよ盛になった農村社会の共同研究において、社会学研究者がいわば主導的立場にたつて隣接諸科学研究者の協力を得て行うという事例がようやく実施されるようになってきたことが、その背景にあっ

たことは否定できまい。そして、同年十一月から準備の打合せ会がもたれ、年一回の討論会の開催と年報の出版のほかに、各地で研究会を開くことと、会員の平素の通信連絡を万難を排してもやってみることが決まった。そこで生れたのが「研究通信」であった。しかし、当時の学会でそうした研究通信を出していたところはほとんどなかった。研究会の本部は有賀先生のおられた東京教育大学の社会学研究室であって、先生と中野卓・森岡清美の三氏が本部事務委員となり、福武直・武田良三の両先生が主として年報の編集・出版のことにあたられたが、通信編集部は私たちの本郷の研究室であった。当時の助手は私に北川隆吉君。その年四月には松原治郎君が大学院に進学してきた。編集・印刷の技術をはじめ何もかもないなかで始められた「研究通信」の発行であった。

印刷については三号からプロに外注することになるが、一号と二号は、北川・松原両君と私の三人で刷り上げたこと記憶している。両号とも、編集は拙く、印刷は汚い。一号をご覧になって二号に「研究通信への期待」をよせられた喜多野清一先生からは、「村居炳辺の一興」と評され、川越淳二氏から三号で「読むのに「苦勞」と指摘される始末であった。また中野卓本部事務委員は、この「不評判を挽回する印刷が可能」になるための「会計上の見通しの好転」を二号の「中間的会計報告」で訴えなければならなかった。たしかに、おおせのとおりである。あの研究室の一隅で手をまっくらにして三人で刷り上げ、いざ発送という段になって、少しでも読めるものとしてと選別した記憶が、今に残っている。私はとにかく悪筆である。北

川・松原両君は決して字が上手というほどではない。北川君と松原君は、学生時代にピラなど切った経験があったと思うが、私にはその経験もなかった。いまにして思えば、ずいぶん無茶をしたものである。

しかし、曲りなりに一号と二号を出すことができたのは、北川・松原両君がいたからである。北川君は、学会のあり方、そして研究者のいきさまについて独自の見解をすでもっていた。彼の立場からすれば、村研の行き方、とくに研究通信の発行はとくに推進すべきものであった。それだけに熱っぽく鉄筆をにぎってくれたと思う。松原君も、新進の気負いをもってガリ板にむかい、ローラーをおしてくれていた。しかし、そうした作業は、すべて暗くなってからであった。東大文学部中庭の暗さが想い出されてならない。それだけに、一九五三年四月以降、同年初の仙台での第一回の集会まで、精力的に「研究通信」の編集に取り組んだとの印象が、今に鮮烈である。そのためか、中村吉治・木下彰・竹内利美の諸先生たちのお世話で、閉会の辞のないあの集會が楽しく終ったときのこと、これまた追憶に鮮かである。そのときは思ってもみなかった仙台に住みついた私は、もうすぐ二十年になる。時の流れを感じないわけにはいかない。

その流れについておわりにひとこと。「研究通信」一号には島崎稔君の「発足に期待する」が収載されている。「わたしは村落社会学には、門外漢であるが」と書きだされているこの文章は、伝統的な村落社会学的事例研究を批判し、隣接諸科学の人も参加するこの

会に期待し、欣然参加するとして、「とって、村落社会学が、急に田舎娘の厚化粧になっても困るが」と結んでいる。たしか、村落研究者群の周辺にいる若手にも仲間になってもらおうという意図から寄せていただいた一文であった。島崎君のその後の本会での活躍を思うにつけ時の流れを感じるとともに、彼の農村研究の発展に集中的に表現されているような『研究通信』一〇〇号発行までの道程の意義をあらためて知る想いである。